

カール・バルト『教会教義学』『和解論』における教会

阿久戸 義 愛

戦後日本の教会は、バルトの神学に習って教会を建てようとした。しかしヨーロッパでは、パネンベルクを初めとしたポスト・バルトの神学者たちがバルトの神学の歴史的基盤の欠如を指摘し、バルトの神学では教会が建たない、と批判していることをどのように受け止めるべきなのだろうか。バルトの神学において、キリスト者の共同体として形成される教会とは、どのように考えられているのだろうか。本研究においては、『教会教義学』第四卷「和解論」において語られるイエス・キリストにおける「恵みの契約」によって人間が他者との人的共同体の中に位置づけられて立つ、キリスト者の共同体としての教会が、いかなる現実性と意味を持ち得るかを考察する。

バルトはいかなる「教会」を考えているのだろうか。バルトにとって「教会 (Kirche)」はドイツの国教会や市民宗教的キリスト教を意味して否定的に用いられることが多々ある。しかし『教会教義学』においてキリスト者の集まりを積極的な意味で、すなわち伝統的には「キリストのからだとしての教会」という意味において述べるとき、「Gemeinde」(こゝでは「キリス

ト者共同体」と訳す) という言葉が用いている。バルトはこの「キリスト者共同体」がいかなる宗教団体とも取り違えられてはならない⁽¹⁾と言っている。バルトはキリスト者の社会的な組織を問題としているのではない。バルトが主題とするのは教会の現実性 (Aktualität) の問題である。バルトにとって教会が現にそこにあるということは、決して宗教組織や施設といったものごとでなく、「神の言葉 (Wort des Gottes)」が出来事 (Ereignis) となることである。すなわち神の言葉が語られ聞かれるという神の言葉の現実性として、教会の現実性が現れてくるのである。神の言葉が現実性をもつその場所とは、ただ唯一神の和解の意志と約束が語られた場所であるキリストにおいてであり、したがってバルトは、このキリスト者共同体である教会の、「教会のキリスト論的理解⁽²⁾」を目指す。

バルトは和解論において、人間の現実を罪による神との断絶という「悲惨」として描きながらも、キリストの卑下において神が人間の悲惨の中に赴くことで義と認められ(義認、そのキリストの高挙において神によって高く挙げられた新しい人間

（聖化）として描き、神と人間の義認と聖化という二つの運動をキリストにおける一つの和解の出来事、「恵みの契約」の成就の出来事として描いている。このように、人間の贖罪と神との和解とはキリストによって事実となり、キリストによって明らかにされ、キリストによって保証される。そしてバルトは、キリストのもとに集められた群れが「十字架の下の子キリスト者たち」すなわちバルトが「真の教会（die wirkliche Kirche）」と呼ぶものであるとする。キリスト者は、この「真の教会」に、キリストによって集められた者である。したがって、この共同体はキリスト者が作り出すものである以前に、キリストによって「集められた共同体」という性質をもつ。ここでもバルトの主張は、「人間から」ではなく「神から」ということ、神の自由と主権の強調へと向かっている。キリスト者共同体も、ただ神の言葉が現実となり出来事となる十字架の下へと、人々が神によって召しだされることによって成り立つのである。

バルトが「真の教会」と言うとき、「仮象的教会（Scheinkirche）」が対比されている。バルトは一般に、施設として存在する教会を仮象であるとして問題にしない。彼にとって重要なのは、キリストのもとに集められた集団としての真の教会である。したがってこの真の教会は、建物のように常に可視的であるものではない。

「真の教会が可視的になるのは、いつも神の啓示によってである。そして、それが人間によって実際に見られるの

は、いつも啓示によって呼び覚まされた信仰によってである」⁽³⁾。

このように真の教会は、あらゆる瞬間に常に語られる神の啓示と人間の応答によって、はじめて立ち現れ、実在性と可視性を得るのである。教会の働きはたしかに人間の働きであるが、真の教会の実在は「神がそこで働く」ことと「神が人間の働きを引き起こす」⁽⁴⁾ことという二重性において捉えられる。真の教会においては「その主体は神である」⁽⁵⁾のであり、神が働くという特殊な歴史において、その教会は現実性を持つ。十字架の下に立つキリスト者の共同体である教会は、このような神が働く時間、神が働く歴史の中に立ち、このような救済史の流れの中へと進んでいく。

キリスト者共同体はこのような場所と時に現実的（Aktuell）なものとして立つ。キリストの恵みとして、新しい人間として義認と聖化が与えられ、キリストの十字架という場所において、この恵みへの感謝として、神の言葉を証しするキリスト者の共同体が現実のものとなる。

しかしキリストにおいて義認と聖化を与えられた新しい人間も、歴史的に存在する古い人間としては、依然として罪の状態にあるという現実は変わらない。人間が新しい者とされる出来事、義認と聖化の事実、神が語られる瞬間において暫定的に証示されるだけであり、人間の歴史においては、キリスト者も完全な罪からの解放を再臨の時まで待たなくてはならない。そ

のような場所と時の中に存在の根拠を持つキリスト者共同体も、歴史的には他の共同体と同じくこの世において存在する共同体である。「キリスト者の群れも、そのような人間の世に属し、そこで働き考え語り行動する⁽⁶⁾」。しかしこのキリスト者共同体には神の証示が「甦りと再臨の間の時間に、この世において⁽⁷⁾」与えられている。キリスト者共同体はキリストによって啓示された「既に」始まっている「終末時」(Endzeit)⁽⁸⁾の中にある。神の歴史・永遠はあらゆる瞬間に突入してきており、神の恵みの受領においてあらゆる瞬間が永遠に関わる歴史の終末なのである。しかし同時に、キリスト者共同体は約束された究極の再臨が「未だ」来ていないという「中間時」(Zwischenzeit)⁽⁹⁾に立っている。この「中間時」は、この世におけるキリスト者共同体としての教会に与えられた「教会の時間」(Zeit der Gemeinde)⁽¹⁰⁾である。キリスト者共同体は神の歴史に参与しつつ、神に働かれて「共同体において起こる人間的活動によって、人間世界の只中に生きる⁽¹¹⁾」。神の恵みの契約の証示を受けてそこに存在根拠を持ちつつもこの世の時を旅する共同体の時間において、中間時としてのこの世において、キリスト者共同体には為すべきことがある。

このキリスト者共同体は、キリストに働かれてこの世において「人間世界全体の聖化を暫定的に表示するに適するもの」とされる。それはキリスト者共同体が、キリストによって証しされた「恵みの契約」という報知を、既に与えられているからである。キリスト者共同体は、人間が神との「恵みの契約」の関

係にあるという、未だ可視的となっていないが根源的には既に成就されている出来事を、この世において暫定的に可視的なものとして証示するという、神への「奉仕」を持っている。したがってキリスト者共同体がこの世で為すべきことは、端的に「世のために働くものとして、世に対して神の言葉を証しする⁽¹²⁾」ことである。

「主イエスは、キリスト者共同体を自身へと招き、全世界に『彼において結ばれた神と人間の契約は世界歴史の最初にして最後の意味であり、その将来の啓示は、今ここですでに効力を持ち生命を持つ全世界の偉大な希望だ』ということを告知するべく任命された民として、キリスト者共同体を派遣し給う。』⁽¹³⁾

キリスト者共同体は、イエス・キリストの十字架において出来事となり成就された「恵みの契約」を、キリストが「福音についての認識を持たず、それを必要とする人間⁽¹⁴⁾」、「神が憐れみを示し給う人間⁽¹⁵⁾」に対して、「全ての人間に關しての、全被造物に關しての大きい喜び」として、この世において暫定的に証しする。このような証しという神への奉仕へとキリスト者共同体が向かうことで、キリスト者共同体はこの世のために存在し、あの絶対的な瞬間と場所に立ちつつ、この世に派遣されていくのである。このキリスト者共同体の派遣と神への奉仕のために共同体に与えられた時間が、中間時としての「教会のた

めの時間」である。そのキリスト者共同体の行為を「奉仕(Dienſt)」と呼ぶ。

この共同体の行為は「奉仕」である。そしてこの奉仕は「神奉仕であると共に人間奉仕¹⁶⁾」である。さらに言えば、「真実の神奉仕の不可避的な帰結としての真実の人間奉仕であると共に、真実の人間奉仕の根としての真実の神奉仕である」¹⁷⁾。キリスト者共同体の奉仕は、単に神奉仕や単に人間奉仕であることはできない。キリスト者共同体が神に奉仕する際、その奉仕の行為は唯一つ、すべての人間を救うために働かれるキリスト、人間に対して語られる「偉大な『然り』」¹⁸⁾としてのイエス・キリストを証しすることである。共同体の奉仕が証しであることから「全面的・決定的に派遣の奉仕であり、したがって外に向けての奉仕である」¹⁹⁾。キリスト者共同体は神からの委託に奉仕するとき、その奉仕は必然的に人間奉仕でなくてはならない。しかしまた同時に、キリスト者共同体が人間に奉仕する際、その奉仕は常に共同体の立つべきキリストの十字架を根源的な場所として、「神の側から人間に向けて歩んでいく」²⁰⁾奉仕でなくてはならず、その奉仕が教会の業を教会の業として誇るようなことがあつてはならない。キリスト者共同体の奉仕が、あらゆる瞬間に「その都度新しく神奉仕という性格を得るように、その都度新しく神の御心になうようにと、絶えず請い願ひ、絶えず与えられることによつてだけ、そのような神奉仕を行うことができる」²¹⁾。キリスト者共同体のこの世の人間に対する奉仕が、キリスト者共同体の奉仕であるためには、常にその奉仕が

神の側から、人間の神奉仕の性格の中で新たに起こる必要があり、不斷に神の現臨と活動に働かれてそれを受け取るキリスト者の共同体でなくてはならない。

第二に、この奉仕は「神奉仕であると共に人間奉仕」である。したがって以下のことが帰結する。

「この奉仕は、考えうるどのような形でも、神や人間との中立的共存ではなく、また神や人間あるいは双方に対する支配や自由処理ではない。奉仕とは、能動的な従属である。そして、共同体の奉仕としては、それが由来する神のもとに能動的に従属することであるが、しかしそれと同時に、神に奉仕するとき共同体が身に向けて奉仕すべき人間のもとにも能動的に従属するということである。」²²⁾

このことからキリスト者共同体の奉仕は、ただ奉仕することしかできず、「人間に対する神の業をその目標へと導くこともできなければ、人間を導いて神の業を受け容れるようにすることもできない」²³⁾のである。この共同体には「その奉仕以外のことをするように命ぜられていない」。しかし命ぜられまた許されている唯一の行為であるそのような奉仕において、キリスト者共同体はまったく「特別な奉仕²⁴⁾」を行う。それはキリスト者共同体が神奉仕と共に人間奉仕を行うとき、「そこでは、またそこでだけ、和解の奉仕が行われる」のである。キリストのもとにあつてキリストに従ひ、キリストの肢体としてキリスト

の業に従属することによって、キリスト者共同体はキリストにおいて啓示された恵みの契約・和解の事実を、「今、こゝで」先取りし、神奉仕・人間奉仕として証しするのである。

キリスト者共同体の奉仕をこのような人間の限界内に見るバルトは、ローマ・カトリック教会や東方正教会がキリスト者共同体に許された奉仕の限度を超えていると指摘・批判している。それらの「教会」ではその教会自体の制度や活動に、特に「恩寵手段」としての sacrament の執行に様々な機能を付与し、その執行の際に教会は「イエス・キリストご自身と同様に、人間のかつ神的に——神的な実在性と全権を持つて人間的に存在し働く」⁽⁸⁵⁾ ようなものとなってしまう。しかしバルトが堅持するのは「神と人間の質的差異」であり、人間あるいは教会をイエス・キリストの代理者として、自分の行為をイエス・キリストの存在と行為の反復・継続として理解してはならない。そうではなく、キリスト者共同体は「洗礼者ヨハネと同様に、来るべき方の靴の紐を解くに値しない者として、ただ光の証人として奉仕し、自ら光であろうとせず、ただ一つの真の光の輝きの中で明るくあろうとする」⁽⁸⁷⁾。教会というのは確かに地上的・歴史的形造物であり人間の働きと行為によって形成された人間的形造物であるが、その人間の働きが人間自身の働きを証しするのではなく、神が主体として自由に働き給う愛を受け取ることによってその恵みの契約を証しするとき、教会がキリストに照らされ、キリストの中で輝き、キリストの光によって輝く光となつて、その証しをこの世に対して訴える。したがってキリ

スト者共同体は、この限界のうちに留まらなくてはならない。しかしこの限界内に留まるということによって、「そのことより以下のことではなく、そのことより以上のことをする」⁽⁸⁸⁾ のである。

キリスト者共同体がこのような奉仕としての証しを行うとき、そのことによって「交わり」(Gemeinschaft)を打ち建てる⁽⁸⁹⁾ ということを行う。キリスト者共同体は、その証しによって「恵みの契約」の關係、すなわち「イエス・キリストにおける神と人間の交わりを証しし、そのことに基づいてイエス・キリストの肢体としてのキリスト者共同体との特別な交わりを証しし、そのことに基づいて神が自身と自身が造り給うた全世界との間に新しく決定的に打ち建て給うた交わりを証しする」⁽⁹⁰⁾ のである。キリスト者共同体はこのような証しをこの世において行うことで、「人と人との間の交わり」を打ち建て、神と人間との間の交わり、「恵みの契約」へと招くキリストと人間との交わり、神と全世界との交わりを打ち建てると言う行為は神の行為であつて、人間やキリスト者共同体の爲す行為ではない。しかしこの神の行為を感謝として証しするとき、キリスト教的愛の自己否定と自己贈与によつて、「少なくとも微として人と人との交わりを打ち建てること」⁽⁹¹⁾ はキリスト者共同体の爲しうる行為なのである。

「人間すべての救いのために結ばれたただひとつの契約を認識することによって、彼らすべてに向けられたただひとつ

つの神の自由な恵みへの自由な感謝へと人々を呼び出し、彼らすべてをその恵みの支配領域内でのただひとつの自由な奉仕へと呼び出すとき、共同体は彼らを集め結び付け一つに保ち、彼らを互いに結合する。」^[62]

この共同体は「すべての国民を弟子として」^[63]キリストの十字架の下に呼び出すために、全世界に向けて証しをし、人々との交わりを打ち建てる。

「したがってキリスト者共同体は、諸国民間の境界や区別を廃棄はしないが、しかしまた、それを是認もしない。キリスト者共同体は、むしろそれらすべての諸国民の中を横切って、自分自身を一つの新しい民として、すべての諸国民に属する者たちが互いに出会うだけでなく、一つになるような民として、集められる。この民へと集められることによって、人間は先ず第一にこの新しい民に属する者、キリスト者である。」^[64]

ただし十字架の下へと人々を呼び出すこのような共同体の行動はもちろん、「自分の奉仕を世の人間に対する関係において何らかの優越や成功や勝利を得ようとする試み」^[65]と混同されてはならない。キリスト者共同体が主張するのは自らのことではなく、「決定的な無私のあり方においてのみ (nur in entschiedener Selbstlosigkeit) 、イエス・キリストの事柄を主張する」^[66]ので

ある。

このような神の恵みに働かれた無私的な奉仕の行いによって、キリスト者共同体は「非空間的場所」である「キリストの十字架の下」からこの世へ向かって、また「非時間的時間」という絶対的瞬間から歴史的に、働くことができるのである。

「教会という概念は、動的な現実を言い表す概念である。この概念は、死人の中から甦り給うた主イエス・キリストについて語り、そこから彼の将来の啓示に向かって急ぐ共同体について語る。」^[67]

キリスト者共同体としての教会は、静的なものでなく、このように動的なものとして捉えられる。そうすることで、この教会は「教会の時間」において与えられた使命として、神の証しを為し、この世における歴史的時間の中でキリスト者の共同体が集められ、現実のものとなるという、「神と人間との間の特別な出来事」^[68]が生じるのである。ここにキリスト者の、そしてキリスト者として集められた共同体としての教会の、「恵みの契約」に基づいて人と人との交わりを打ち立てるといふ、水平次元における働きの意味と可能性が開けているのである。

以上、キリスト者共同体が歴史的にこの世へと派遣され、キリストの十字架の下にすべての人間を一つとする交わりを立てる、というバルトの「教会」思想を見てきた。

人間が自らの罪性を真剣に受け止めてその限界性に留まること、そして人間的、自力的な業を退けて、神が神自身の自由と意志で与え給う恵みをただ受領すること、神の愛に働かれて人間は愛する者として新しくされ、この契約関係において人間が唯一要求され許されている行為へと向かう。その行為とは、恵みへの感謝として与えられたものを、キリストと共に、キリスト者相互に、そして全世界へと証しすることであった。

この証人としてのキリスト者は、証しにおいて他者へと自己を贈与していく愛を、キリストの愛に働かれて自ら行い、その愛と証しの行為によって、全く新しい交わりを打ち立てる。それがキリストの十字架の下に立つゲマインデ、「真の教会」としてのキリスト者共同体である。この共同体は、未だ歴史の中にあって既に神の救いの事実を告げ知らされたものとして、特殊な場所、特殊な時の中に存在根拠を持ちつつ、中間時としての「教会の時間」に歴史的に生きる。この共同体は、中間時としてのこの世に派遣され、神の証人として神と人間とに奉仕する。この奉仕の行動において、キリスト者共同体は無私の活動として自己を神と人へと贈与し、恵みを感謝でもって受領する神奉仕において、神を人に証しする人間奉仕を行う。この共同体のこの世における人間奉仕の働きによって、キリスト者共同体はすべての人を一つとする交わりをこの世において打ち立てる。

バルトは教会を、恵みによって集められたキリスト者の人的共同体と捉えた。この共同体は、「証し」という行為を、しかし

唯一の行為を、神から委託されて持つている。「恵みの契約」の真の証人であるイエス・キリストが永遠に、あらゆる瞬間に「今ここで」その契約の証しを行っている故に、この証しをキリストに倣って、キリストに働かれて行う者は、キリストの十字架の下に、換言すればキリストを頭とした教会という共同体へと位置づけられる。このキリスト者の共同体として、キリスト者相互に証しをし、また全世界へと証しを行っていくのである。だがこの共同体は、やはり水平次元への視点が薄いように思われる。共同体の構成員間の関係は隣人愛として語られ、相互の証しを「魂の配慮」として行う、と言われているが、やはり垂直次元の神の愛との関係に対する付随的關係という印象を免れない。また全世界に対するキリスト者共同体の歴史的行為も、ただ証しのみであり、それ以上であることを許されないため、キリスト者共同体の歴史的課題は布教ということのみに留まり、あくまで霊的な共同体として、バルトが現実には直面したナチ問題や東西問題といった歴史的諸問題に対して何も具体的に為すところがなくなってしまうかのようなのである。

だが現実には、少なくともナチ問題について、バルトは黙っていないかった。ナチ問題やドイツ教会闘争におけるバルトの立場の詳述はここではできないが、バルトがナチズムを神学問題として捉えて戦ったのはなぜか。それは、ナチ政権下の教会が、本来すべきであった証しをなさず、却ってキリストにおける一つの交わりが、ナチ政府の帝国教会の組織によって「ドイツ的キリスト者」という仕方で分けられ、教理に干渉を受けた

ことに對して、教会の歴史的課題として断固とした「否」を述べた。一方で東西問題についてバルトは、教会が本来すべき証しを行う限りで沈黙を守り、東と西の問題に巻き込まれず教会の課題に専念すべき、という立場をとった。こうしたバルトの立場には一貫した具体性がある。それは、「聖書に即して」（これは「ローマ書」以来の主題である）、キリスト者共同体が派遣される唯一の行為として「証し」をする点であり、そして「聖書に即して」、「聖書が語るところで語り、聖書が沈黙するところで沈黙する⁸⁹⁾」という「証人としてのキリスト者」の基本的態度を守っている点である。バルトはこのようなキリスト者の立場として、真の教会としてのキリスト者共同体を考え、そのキリスト者共同体がすべき歴史的具体的行為を考えていた。やはりバルトは「恵みの契約」における、恵みの愛と感謝としての証し、という垂直次元への集中を維持し続けている。だが、まさに垂直次元に集中することによって、バルトはそこにキリスト者の立つべき場所を見出し、「証し」という共同体の課題に集中することによって「聖書が語るところで語る」という「証人としてのキリスト者」の歴史的行為の可能性と意味を見出している。

バルトは彼の神学の集大成である『教会教義学』全体において、この「恵み」が証しされる唯一の一点であるイエス・キリストに集中した（キリスト論的集中）。キリスト者は恵みを与えられてイエス・キリストの十字架の下に立ち、イエス・キリストの証しという時間の中に働く永遠すなわちバルトの言う

「原・歴史(Ur-Geschichte)」という時間性の中に生きる。そしてまたキリストの恵みによって、罪人としての「質的差異」を残しながらも、神によって義認と聖化を与えられて、神の証人として歴史的に働く。ここで歴史的に働くというのは、歴史的に生きるすべての人間を、キリスト者共同体の立つ「教会の時間」すなわち非歴史的時間に根拠を持つ共同体の時間性へと引き込むということ、絶対的瞬間へと目を向けさせ人間の歴史性を廃棄させるものとして歴史的に働くということを意味するであろう。「恵みの契約」において示された新しい人間の姿、キリスト者共同体としての教会の姿は、イエス・キリストという「聖書の事柄に集中」し、キリストにおいて、キリストと共に、生きるという姿である。バルトの『ローマ書』以来の「パウロと共に」という「同時性」に生きるスタンスは、『ローマ書』と『教会教義学』の間の強調点の転換にもかかわらず、ここでも変わっていないのである。

バルトが主張するような教会の姿は、地域や文化と密接に繋がったヨーロッパの教會的伝統を破壊するようなものであった。そしてバルトの主張は、まさにそのような「仮像的教会」を破壊せんとするものであった。バルトの神学は、従来の教会伝統を破壊するこのような反歴史主義(Anti-historicism)によって、歴史性を脱構築する働き⁹⁰⁾を持つ。そして、そのような働きを基礎付けるものとして、バルトは「恵みの契約」の絶対的優位を主張し、その契約関係に基づくキリスト者たちの、人的共同体への展開を論じていくのである。

「これまでの形では人間の側で未完結であった契約の輪が、この新しい形では完結されるということである。それは人間がこれまでよりも上等の人間になるからではない。それは、神がその同じ人間を全く違った仕方であ扱い、その御手をいけば背後から人間の上に置き給うからであり、神ご自身が人間を御許に転向せしめ給うからである。」¹¹⁾

神による「恵みの契約」の完成、これがバルトのテーゼであり、バルトの結論である。

注

- (1) Die Kirchliche Dogmatik (ドクトゥギマティク), Zürich 1953 (2.Aufl.), IV/2. 777f.
- (2) ibid. 768.
- (3) ibid. 701.
- (4) ibid. 697.
- (5) ibid.
- (6) ibid. 699.
- (7) ibid.
- (8) KDIV/1. 821.
- (9) ibid.
- (10) ibid. 810.
- (11) KDIV/2. 701.

- (12) KDIV/3. 951.
- (13) ibid. 780.
- (14) ibid. 923.
- (15) ibid. 925.
- (16) ibid. 952.
- (17) ibid.
- (18) ibid. 917.
- (19) ibid. 953.
- (20) ibid.
- (21) ibid.
- (22) ibid. 954f.
- (23) ibid. 955.
- (24) ibid.
- (25) ibid. 956.
- (26) ibid. 958.
- (27) ibid.
- (28) ibid.
- (29) ibid. 1030.
- (30) ibid.
- (31) ibid.
- (32) ibid.
- (33) MAT28:19. 傍文バルト。
- (34) KDIV/3. 1031.
- (35) ibid. 950.

(36) *ibid.*

(37) K. Barth, 井上良雄訳、『教会——活ける主イエス・キリストの活ける教団』（カール・バルト著作集3）、新教出版1997, 131.

(38) *ibid.*

(39) 大木英夫、『組織神学序説』、354.

(40) バルト神学は確かにヨーロッパの教会伝統を破壊するようなものであった。このようなことから、バルト神学は「ポストモダンの神学」とも称される。

(41) KDIV/L. 33.

（あくど・よしや 筑波大学大学院人文社会科学研究所）